

釈論大江千里集（五）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 半沢 幹一，小池 博明 |
| 雑誌名 | 共立女子大学文芸学部紀要 |
| 巻 | 66 |
| ページ | 37-60 |
| 発行年 | 2020-02 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1087/00003357/ |

釈論大江千里集（五）

| | |
|---|---|
| 小 | 半 |
| 池 | 沢 |
| 博 | 幹 |
| 明 | 一 |

本稿は、「釈論大江千里集（一）（二）（四）」〔長野工業高等専門学校紀要〕五一号、二〇一七年六月、同五二号、二〇一八年六月、同五三号、二〇一九年六月、いずれも電子版のみ）および「同（三）」〔共立女子大学文芸学部紀要〕第六五集、二〇一九年三月）に続き、春部の一四番歌から一八番歌を取り上げる。

本注釈の目的と意義の詳細、注釈の凡例や参考文献などについては、旧稿の「釈論大江千里集（一）」を参照されたい。

歳時春猶少（歳時、春猶ほ少なし）

一四 とし月にまさるときなしと思へばやはるしもつねにすくなかるらん

【通釈】

一年のうちで（他に）まさる季節がないと思うからなのか、まさに春だけは例年（日数が）少ないのだろう。

【語釈】

とし月に「としつき（年月）」は、歳月の流れや長年の意味で用いられるのが一般的であるが、「冬過ぎて春の来れば年月は（年月者）
 新たなれども人は古りゆく」（万葉集・十・一八八四）や「あづさゆみ春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな」（古今集・
 二・春下・一二七・凡河内躬恒）などのように、春から始まる四季つまり一年を表わすと解釈できる例もあり、当歌もその意味でとつ
 ておく。なお、「に」という格助詞は下接する「まさる」との関係で、「く二まさる」という比較の対象を示すように見えるが、一首全
 体の整合性から、比較の背景つまり「くにおいて」の意とみる。

まさるときなし 底本の「まさるとしなし」を、他本により改める。「とし月にまさるとし」という表現のままでは、「とし月」と「と
 し」が実質的には同語反復となり、そもそも意味を成さないからである。『全釈』では「とし」の本文をとり、「歳月の中で、春の日が
 長くなる年」と訳す。この「歳月」と「年」はおそらく同義であり、それを「春の日が長くなる」という限定により差別化しようとし
 たのであろうが、この季節の長短に関する限定は下二句と表裏の関係にあり、同じことを繰り返したにすぎない。それを回避するため
 には、「とし」を「とき」とし、「まさる」は増えるの意ではなく、優れるの意とせざるをえない。この場合の「とき」は季節のことと
 ある。なお、「まさるとし」という表現例は見当たらないが、「まさるとき」の用例には、「たちばなのみさへはなさへそのはさへふた
 さへいれどまさる時なき」（家持集・一五八）という例がある。

と思へばや 句頭の「と」は文節としては、第二句末に位置するところであるが、それだと字余りになる。第三句に入れても字余りに
 なるが、ア行音（「おもふ」の「お」）を含むので許容される。初・第二句を受け、第三句までで確定条件句を構成する。句末の疑問の
 係助詞「や」は歌末の「らん」と呼応する。「くばや」という句末表現については、一番歌の【語釈】「むすればや」の項および当歌の

【補注】を参照。

はるしもつねに 「しも」は、上接の「春」を特定強調する副助詞。四季の他の季節に比べて春だけを取り立てる。本集の四季部のうち、
 「春」という語は二六首、本集の実に二割余りの歌に詠み込まれ、「秋」の一八首、「夏」と「冬」の一首ずつに比べ、圧倒的に多い。
 各部立の歌数を見ても、春部二五首・夏部一首・秋部二首・冬部二首であり、しかもすべての部立に「春」を詠んだ歌が見られ
 るところに、本集での春偏重の一端が現れている。「つねに」は副詞として結句の「すくなかるらん」を修飾する。

すくなかるらん 底本は「すぐれたらん」という本文であるが、誤写と見て、他本により「すくなかるらん」に改める。「すぐる（優）」では第二句の「まさる」と意味が重なり、上句と下句が同じ内容の繰り返しになるし、そもそも句題の「少」字に対して、「すぐる」を当てること自体が不審である。また、「春」に関して、「すぐる（優）」を用いる例はほとんどないのに対して、「少し」とする例はあるということもある。その例の多くは、「こゑたえずさへづれのべのももちどりのこりすくなきはるにやはあらぬ」（後拾遺集・二・春下・一六〇・藤原長能）、「色ふかく匂へるふぢの花ゆゑにのこりすくなき春をこそ思へ」（公忠集・六）などのように、「残り少し」という形で見られる。また、春を少ないとする理由や背景として、「いたづらにすぐす月日はおもほえて花見てくらす春ぞすくなき」（古今集・十一・賀・三五・藤原興風）や上掲の公忠歌のように、花を詠み込む歌が多い。歌末の助動詞「らん」は、「はるしもつねにすくなかる」という確定的事態に対する理由を、「とし月にまさるときなしと思へばや」と推量することを表わす。【補注】も参照。

【補注】

当歌全体の骨格を成す「……思へばや……らむ」という上句と下句を結び付ける表現は、「ともしするほぐしをまつとおもへばやあひみてしかの身をばかふらん」（千載集・三・夏・二〇〇・賀茂重保）、「まつ」は他本に「つま」とある）、「霜がれの草葉をうしとおもへばや冬の野べは人のかるらん」（貫之集・二〇）、「うきよをばたびのやどりとおもへばやくさまくらむしたえずなくらむ」（大斎院前の御集・一八一）などのように、数多く見られ、ことに院政期以降は類型表現として定着した感がある。当歌はこの類型の最も早い時期の例になるう。

さらに一般化した「……ば（や）……推量の助動詞」となると、「秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり」（古今集・四・秋上・一九五・在原元方）、「思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを」（古今集・十二・恋二・五五二・小野小町）など、古今集の典型的構文の一つとしてあり、確定的事態から推量される原因をどのように見出し結び付けるかという点に、詠み手の技量が問われた。

当歌の場合、「はるしもつねにすくなし」ということが確定的事態として設定されていることになる。これは四季が等分に配分される暦日上はもちろん誤りではあるが、春が他の季節よりも興趣にまざるとみなす人々にとっては、それにいつまでも飽くことがないという、普遍的な心理をもって確定的事態とするのである。ところが、その原因として推量されるのが、「とし月にまさるときなしと思ふ」

という、まさにそのような普遍的な心理である。つまり、その心理的な原因がなければ、当の事態も確定的なものになりえないということである。この点において、事態単独での確定性を前提として成り立つ「……ば（や）……らむ」という構文の他の歌とは、決定的に異なる。ただし、その結び付けは堂々巡りとも言えるものであって、それ自体は本文を校訂してもまったく変わらない。それが千里歌の独自性と言えるとしても。

なお、赤人集に「としつきにまさるとしなしとおもへばやはるしもつねにすくなかるらん」（赤人集・九）とあり、新勅撰集にも「歳時春尚少といへる心をよみ侍りける／年月にまさる時なしとおもへばやはるしもつねにすくなかるらん」（新勅撰集・二・春下・一二・二・大江千里）とある。結果的に、本稿で採用した本文は、この新勅撰集所載歌と同一ということになる。そこには、もしかしたら同じく初出歌本文に対する一つの合理化・整合化という可能性も否定しがたい。仮に「としときにまさるとしなしと思へばや春しもつねにすぐれたらむ」という底本本文どおりであったとしても、四季において（他の季節が）優るといふ年がないと思うからなのか、やはり春だけがいつも（他の季節よりも）優れているのだらう、のように一応解釈できなくはないものの、上下句の重複感がはなはだしく、それなりの一首としては成り立ちえない。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の五言律詩「晚春登大雲寺南樓、贈常禪師」詩（卷十六・〇九二二）であり、句題に採られたのは頷聯の一句目である。

花尽頭新白 花尽きて頭新たに白し、

登樓意若何 樓に登るも意若何^{いかな}。

歳時春日少 歳時春日少なく、

世界苦人多 世界苦人多し。

愁醉非因酒 愁醉は酒に因るに非ず、

悲吟不是歌 悲吟は是歌ならず

求師治此病 師に此の病を治せむことを求むれば、

唯勸読楞伽 唯だ楞伽りょうがを読むことを勧むるのみ。

原拠詩の相当句は「歳時春日少」となっているが、本集の句題は「歳時春猶少」で、四字目の「日」が「猶」になっている。後年の文集百首では「歳時春日少」とあり、定家はそれに「いたづらに春日すくなき一年のたがいつはりにくるるすがのね」（拾遺愚草員外・四一九にも）という和歌を付す。原拠詩での対となる句が「世界苦人多」であるから、事実の記述としての対応という点では、「猶」よりも「日」のほうが適當であろう（「猶」とした場合には、表現主体の情意が含まれる）。句題の表現を千里が勝手に変えたとは考えにくいので、参照したテキストの違いによるものかと推測される。

どちらにせよ句題自体の内容としては大差なく、平明である。にもかかわらず、和歌のほうで校訂を余儀なくされたのは、五言一句と和歌一首の言語量の差もさることながら、平明すぎると言ってもよい句題に対して、和歌としてそれなりに成り立たせるためにどのように表現すればよいかについて苦慮した結果ではないかと思われる。単に訳すだけならば、たとえば「ひととせに 春なほ少なし」のような二句で済んでしまうからである。

白氏文集には、すでに指摘があるように、「一歳中分春日少 百年通計老時多」（春晚詠懷 贈皇甫朗之）詩・三四四五」という類句もある。当該詩が原拠詩であるとする、なぜこれが選ばれたかを考えるに、老残の身を嘆くことよりも、対句となる「世界苦人多」における苦しみの原因の一つに「歳時春猶少」ということもあると捉えられたからではないだろうか。とすれば、当歌においても、それが背景として含意されていると考えられる。

句題と和歌の表現上の対応を見ると、「歳時」は「とし月」に、「春」は「はる」に、「少」は「すくなし」という具合に対応していて、句題にあつて和歌に欠けているのは「猶」相当の表現であるが、「猶」の表わす、前提となる予想を「つねに」という形で言い換えたと見ることができよう。和歌のみに見られるのは、第二・第三句「まさるときなしと思へばや」である。この部分はおそらく、原拠詩における「世界苦人多」に関わる含意を裏側から表現化したものであろう。これは、文集百首の定家歌にある「いたづらに」という表現にも通じる。

当歌は、春を詠んだ歌にはちがいないが、いつの時点で詠んだかは特定されえない。具体的な春の景物がまったく詠み込まれることない、観念的な詠みぶりである。ただ、原拠詩はその詩題からも明らかなように、晩春に詠まれたものであり、しかも、本集において

も、当歌後続の歌には、「あかでのみすぎゆく春」(一五)、「かねてよりわがをしみこし春」(一六)、「はるをのみこもかしこをしめども」(一七)、「すぎゆく春をしめども」(二〇)のように、ゆく春を惜しむ歌が続くことから、当歌も春の終わり頃の、惜春の情を詠んだものとして、そこに位置付けられたと考えられる。

送春那得不慇懃(春を送る、^いなかでか慇懃ならざるを得む)

一五 あかでのみすぎゆく春をいかでかはこころをいれてをしまざるべき

【通釈】

(こちらが)満足することもないのに(ただ)過ぎゆくばかりの春を、(その終わりともなれば)どうして心を込めて惜しもうとしないことがあるのか(いや、心を込めて惜しむに決まっている)。

【語釈】

あかでのみ 「あく(飽)」+「で」(打消しの接続助詞)+「のみ」(副助詞)から成り、一句全体で次句の「すぎゆく」を修飾する。「あく」は満足するの意で、当歌でその対象になるのは春である。それが「で」で打ち消され、春に満足することなく、の意となる。続く「のみ」は、上接する「あかで」を限定するように見えるが、この位置は措辞上の都合によるものであって、意味的には、「あかで」が修飾する「すぎゆく」までの一まとまりを限定しているのとるのが適切と考えられる。満足しないだけで過ぎゆく、ではなく、満足せずすぎゆくだけ、ということである。その際、満足しないのは春ではなく、詠み手である(本集二〇番歌の「なげきつつすぎゆく春をしめどもあまつそらからふりすてゆく」における「なげく」も同様である)。そのうえで、上三句の中心にあるのは春のほうであり、その春に関して、「のみ」による限定を必要とし、かつふさわしいのは、「あかで」ではなく、「すぎゆく」のほうであろう。早くは、富士谷成章の『あゆひ抄』に、「ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむやどにうゑて見ましを」(古今集・四・秋上・二三六・

壬生忠岑）や「相坂のゆふつけどりもわがごとく人やこひしきねのみなくらむ」（古今集・十一・恋一・五三六）における「のみ」の用法について、「（のみ）をめぐらして『ひとりながめてばかり』が『音を鳴きてばかり』（中略）と心得れば、いよいよやすし」（中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』風間書房、一九六〇年による）とあり、『日本語文法辞典』（日本語文法学会編、大修館書店、二〇一四年）の「のみ」の項にも、「のみ」は下接する「句全体に関わり、その句の表す事態一種類だけが存在し、それ以外の種類の事態がないことを表す」とある。「あかでのみ」という句の用例は少なく、古今集前後では他に見当たらない。早い例は、「あかでのみみればなるべしあはぬよもあふよも人をあはれとぞ思ふ」（大和物語・一三四段・二二一）、「あかでのみわかるるかりのたむけには花のにしきもとぢられぬかな」（宇津保物語・あて宮・五八七）などのように、物語中の和歌に見える。さらに、春についてとなると、新古今集の頃までに、「てにむすぶいしみの水のあかでのみはるにわかるるしがの山ごえ」（千五百番歌合・五七二・藤原良経）がある程度。すぎゆく春を「すぎゆく春」という表現は、古今集前後から散見する。その中で目を引くのは、本集成立前後に、「あかずして過行く春の人ならばとくかへりこいはいはましものを」（寛平御時后宮歌合・三四）、「あかずしてすぎゆくはるをよぶことりよびかへしつときてもつげなむ」（亭子院歌合・三〇・藤原興風）、「あかずしてすぎゆくはるにただちあらばことしばかりのあとはよかなん」（興風集・二三）などのように、当歌の「あかで」と同義の「あかずして」に続く形で見られることである。これらからうかがえるのは、春が過ぎ行く、その過ぎ行き方の如何が問題なのではなく、留まることなく、過ぎ行くことそれ自身が「あかで（あかずして）」であるということである。前項で取り上げた「のみ」の限定も、過ぎ行くこと以外はいえぬといえである。

いかでかは「いかでかは」は、どうしての意で、疑問あるいは反語を表わす。「か」という係助詞の結びは結句の「べき」で、その範囲の内容に関する疑問あるいは反語である。より詳しくは、【補注】参照。同句は、万葉集はもとより、本集と同時代の古今集前後にも用例を見出しがたく、その後に「緑なる松ほどすぎばいかでかはしたばかりももみぢせざらん」（後撰集・十七・雑三・一二二五）をはじめ、当歌と同じく「べし」で結ぶ「こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき」（伊勢物語・三十三段・六七）、「いかでかはおもひありともしらすべきむろのやしまのけぶりならでは」（詞花集・七・恋上・一八八・藤原実方）などの類例が見られるようになる。これらの例に照らしても、当歌の「いかでかは」は、単なる疑問ではなく、修辭的な疑問つまり反語をとるのが適切と考えられる。

ここをいれて 異本および赤人集所載の同歌では「ここにいれて」という本文になっている。どちらにせよ、和歌での用例はきわめて少なく、「ここをいる」のほうには、「つゆをだに玉となしつるはちすばにおもふ心をいれてみせばや」（古今六帖・六・草・はちす・三七九七）、「あきやまにここをのみもいるかなもみぢのいろのふかきまにまに」（陽成院一親王姫君達歌合・二七）などが見られる程度。これらでは、心ヲ「はちすば」あるいは「あきやま」ニ「入る」という格関係が認められるが、当歌の場合には、二格相当の語は見当たらない（「心ニ入る」ならば、第二句の「春を」と結び付けうる）。ここでは、一句全体で慣用句的に、気持ちを込めて、熱心にの意を表す連用修飾表現と見ておく。当歌では、結句の「をしむ」を修飾する。なお、句題の「慰懃」の古訓には、万葉集にも見られる「ねもころ（ねんごろ）」という語があり、そのほうが似つかわしくも思われるが、平安以降の和歌にはほとんど用いられていない。

をしまざるべき「をしむ」＋「ず」（助動詞）＋「べし」（助動詞）。「をしまず」に「べし」が下接する例はきわめて少なく、しかも「梅の花かたえ残らずちりにけりかこひてだにやをしまざるべき」（夫木和歌抄・三・春・梅・六四六・宇多上皇）、「かぎりあればゆきてはきぬるみちなれどいづれのたびかをしまざるべき」（清正集・四九）などのように、平安時代は結句においてのみ使用される。「をしむ」のは詠み手であり、その対象はヲ格をとる「春」である。

【補注】

当歌が惜春を歌うものであることは明らかである。逆に言えば、惜春という思いしか詠んでいない。なぜ春を惜しむのか、しかも「ここをいれて」なのか、その具体的な根拠なり状況なりがまったく示されていない。句題および原拠詩を参照すれば、それが三月末だからという説明もできないが、歌だけからは推察のしようもない。その意味では、思い込みがやたらに強い歌である。ただ、観念的ではあるにせよ、それなりの説得性を持つか否かは、ひとえに根拠を示す上二句に、相応のリアリティが認められるかどうかであろう。

「あかでのみすぎゆく春」というのは、春に関する、詠み手のこれまでのすべての体験から導き出された一つの真理である。つまり、春とは、他の季節とは違って、あくまでも「あかでのみすぎゆく」季節なのである。このことに共感できるとすれば、今、ここで経験している春も例外ではないはずである。この真理に到達すればこそ、心を込めて春を惜しむという境地になるのはいわば当然のことである。

あつて、その当然性の強さが「いかでかは」の反語と結びの「べし」という、強い情意性を示す表現につながっているのである。

この、当歌のような「いかでかは……べき」という表現構成は、「いかでかは」が初句か第三句かで二つに大別される。初句の場合は、「いかでかはしらせそむべき／人しれず思ふ心のいるにいでずは」（拾遺集・十一・恋一・六三四・源邦正）、「いかでかはもりのことの葉しのぶべき／こだかきやどの風のしげきに」（顕輔集・三六）などのように、二句あるいは三句切れとなり、一首が倒置的に組み立てられる。第三句にある場合は、初句・第二句が、①「ともしするしづが心もいかでかはしかあはれとおもはざるべき」（拾玉集・一四一九）のように、一首の主題となつて下句と題述構文を構成する、②「あひさめてのちにあはずはいかでかはころものうらのたまをしるべき」（成尋阿闍梨母集・九九）のように、下句に対する条件句となる、③「こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき」（伊勢物語・三十三段・六七）のように、第二句末に格助詞を置いて、「いかでかは」以下の句との格関係を構成する、の三タイプに分けられる。このうち、①の用例が最も多く、③が最も少ない。

当歌は、第三句に「いかでかは」が置かれるケースの中で最少の③のパターンに相当する。③は第二句末の格助詞を、「は」という係助詞に置き換えれば、古今集的な題述構文になりうるが、当歌では、「春を」を「春は」とすると、「いかでかは」の「は」と重複することになり、避けたのかもしれない（「も」との置き換えは歌意から見て考えがたい）。

【比較対照】

句題の原拠詩は、次の、白氏文集の七言律詩「春去」詩（卷十七・一〇二二）であり、句題に採られたのは尾聯の第二句である。

一従沢畔為遷客　一たび沢畔に遷客と為りしより、

両度江頭送暮春　両度江頭に暮春を送る。

白髪更添今日鬢　白髪更に添ふ、今日の鬢、

青衫不改去年身　青衫改めず、去年の身。

百川未有廻流水　百川、未だ廻流の水有らず、

一老終無却少人　一老、終に却少の人無し。

四十六時三月尽　四十六の時、三月尽、

送春争得不慙 春を送る、争でか慙^{いか}ならざるを得む。

この尾聯の二句は、千載佳句（送春・一二三）や新撰朗詠集（三月尽・四五）にも採られ、それなりに知られていたものと見られる。本集において、絶句にせよ律詩にせよ、句題が最後の句から選ばれることは少ない。

詩題は「春去」であり、尾聯の第一句に「三月尽」とあるから、その時点での詠詩ではあるが、春そのものに対する感慨というよりは、それと重ね合わせての自らの人生に対する感慨を歌うのが主旨であろう。その意味では、句題に選ばれた句も、詩全体から見れば、残り少ない日々を大切に生きようということを表わしている。千里はそのことを重々承知のうえで、春歌として、惜春の思いを詠むための題として転用したと考えられる。

句題と和歌の表現上の対応関係を見ると、「送春」には第二句の「すぎゆく春を」、「那得不慙」には下三句の「いかでかはこころをいれてをしまざるべき」のように、句題の表現はすべて和歌にほぼそのまま、その順番に反映されている。独自に付加されたのは初句の「あかでのみ」だけであり、それとの関係で結句の「をしむ」も取り込まれたのであろう。

「あかでのみ」や「をしむ」という表現が選ばれ用いられたのは、先にも述べたとおり、句題原拠詩とは異なる、惜春歌としてまとめることが意図されたからに他ならない。ただ、句題における「送春」と「那得不慙」は題述関係にあると言えるの対して、【補注】に述べたように、当歌はそうはなっていない。その分だけ、主題たるべき春への焦点化が希薄になってしまったことも否めまい。

春光只是有明朝（春光只是明朝に有るのみ）

一六 かねてよりわがをしみこし春はただあけんあしたぞかぎりなるべき

【通釈】

以前から私がずっと愛おしんできた春は、もう明けようとする、まさに翌朝（からの、たった一日）が（惜しむことの）最後である

ちがない。

【語釈】

かねてより 以前からの意で、次句の「をしみこし」にかかる。万葉集にはなく（「予」という漢字表記は古くは「かねてより」と訓じられたが、現在では「あらかじめ」とする）、古今集以降、初句に置かれることが多く、「かねてより風にさきだつ浪なれや逢ふ事なきにまだき立つらむ」（古今集・十三・恋三・六二七）、「かねてより涙ぞ袖をうちぬらすうかべる舟にのらむと思へば」（後撰集・十九・離別・一三四七）などのように、三句または二句切れとなるか、「かねてよりわかれをしとしれりせばいでたむとは思はざらまし」（貫之集・四三二）、「かねてより花の心をしりぬればさきてもちらん事をしぞ思ふ」（久安百首・春・五一三・藤原隆季）などのように、三句目までの条件句を構成するかが大勢である。当歌はそうした構成とは異なり、三句目までを主題とする表現になっている。

わがをしみこし 「わが」は、直統する動詞との関係から、「わ」（名詞）＋「が」（主格助詞）とする。本集で、「わが」は当歌も合わせて一四首に見えるが、「が」が主格で用いられるのは当歌のみである。「をしむ」はその対象に対する愛情のありようを表わすが、対象が実在すれば、それを大切に思うこと（愛惜）になり、消失すれば、名残惜しく思うこと（哀惜）になる。「をしみこし」は、「惜しむ」＋「来」＋「き」（助動詞）から成り、次句の「春」を修飾する。同句は平安時代後期以降に、春との関わりにおいて、「をしみこし花のたもとはそれながらうき身をかふるけふとならばや」（太皇太后宮小侍従集・二八）、「をしみこしおなじ名残のゆかりとて花のみちより春やゆくらむ」（後鳥羽院御集・五二〇）など見られる。複合動詞の後項となる「く（来）」は、補助動詞として、前項動詞の動作・状態が継続する意を表わす。当歌では、惜しむことが続くことであり、初句の「かねてより」の修飾によって、それが長期間にわたることが示されている。ただし、惜しむ対象が「春」であるから、その季節の最初から現在までの期間ということであろう。これに「き」という過去の助動詞が下接していることの意味については、【補注】を参照。

春はただ 初句以下を受けて「春は」までが一首の主題となる。副詞「ただ」は、直後の「あけん」にかかるとも、下二句全体にかかるともとれる。前者ならば「直」の意で、もうまもなく（夜が）明けようとすることを表わすのに対して、後者ならば「只・唯」の意で、下二句の内容つまり明日が春最後の日に他ならないという限定を表わす。三月尽日に焦点化するならば、後者の解釈が適切であろうが、前者によってその日が迫り来る切迫感も表わされていると見ることがができる。同句を用いた、「春はただ花のひとへにさくばか

り物のあはれは秋ぞまされる」(拾遺集・九・雑下・五一二)、「はるはただわがやどにのみむめさかばかれにし人もみにときなまし」(後拾遺集・一・五七・和泉式部)、「あるじをばたれともわかず春はただかきねの梅を尋ねてぞみる」(新古今集・一・春上・四二・藤原敦家)などは、「ばかり」や「のみ」という副助詞や「ぞ」という係助詞とともに、いずれも限定の意で用いられている。

あけんあしたぞ「あした」は、夕べに対する朝という時間帯、前夜に対する、それが明けての翌朝、そして当日に対する翌日、今日に対する明日の意がある。『岩波古語辞典』では「中世以後に、アシタは明日の意味へと変化しはじめた」とするが、『日本国語大辞典第二版』では、明日の意の初例として日本書紀の訓を挙げている。このような揺れは、単独例ではいずれの意か判断しかねることが多いからであろう。当歌の「あけんあした」という表現からは、「あけん」という修飾語が前夜からの連続性を示しているので、翌朝の意味とるのが適切と見られる。ただ、当歌が三月尽日を想定した歌であるとする、朝という特定の時間帯だけでなく、その一日という日ひち単位の始まりであるということのほうが重要であろう。同句は、万葉集に三例見られるが、「ぬばたまの今夜の雪にいざ濡れな明けむ朝に(将来朝ル)消なば惜しけむ」(万葉集・八・一六四六・小治田朝臣東麻呂)や「居り明かしも今夜は飲まむほととぎす明けむ朝は(安気牟安之多波)鳴き渡らむぞ」(万葉集・十八・四〇六八・大伴家持)などは、「今夜」という語とともに用いられているので、翌朝の意に特定される。とくに後者の四〇六八番歌には、左注に「二日は立夏の節に応る。故に明けむ旦あしたに喧なかむ」と謂ふとあって、一夜明けると関心の焦点である時節の区切りの日となるという点で、当歌と共通する。古今集以降にもわずかに見られ、「恋ひつつもけふは有りなましくしげあけんあしたをいかでくらさむ」(拾遺集・十一・恋一・六九六・柿本人麻呂)という歌では、「けふ(今日)」という語があるので、明日の意であるのが明確である。どちらにせよ、「あけんあした」という続き柄が慣用化していたと言える。

かぎりなるべき「かぎり」は限界という意であり、それが時間的な場合には、ある期間の最後という意味になる。当歌も、春の「かぎり」ということなら、暦日上の春という季節の最終日であることを表わす。「かぎり」には評価として最高・最上という意味もあるが、「あした」が最高であることを裏付ける根拠は当歌の表現自体には見出しがたい。「かぎりなり」で時間的な最後を表わすと見られる例として、「別れてはあはむあはじぞ定なきこのゆふぐれや限なるらん」(拾遺集・六・別・三一二)、「身にかへてをしむにとまる花ならばけふやわがよのかぎりならまし」(詞花集・一・春・四二・源俊賴)、「わするなよとばかりいひてわかれにしその暁やかぎりなりけ

ん」(続後撰集・十四・恋四・八六六・藤原良経)などがある。「かぎりなり」という表現に下接する助動詞としては推量系の助動詞とくに「らむ」が多く、当歌のように「べし」が下接する例はほとんど見られない。暦日としてはそうなるはずだという意の「べし」であり、第四句末の「あしたぞ」の「ぞ」と係り結びとなって、その当然性・既定性を表わしている。

【補注】

『全釈』は、一五番歌に続く当歌も、三月尽がらみの歌と捉え、「三月尽を明日に控えての心を歌うところが、この歌の特色である」と指摘する。つまり、三月尽日当日ではなく、その前日であることを特色とみなしているのである。

三月尽日当日を詠歌時とした和歌では、「ゆくさきををしみし春のあすよりはきにし」方にもなりぬべきかな(後撰集・三・春下・一四二・凡河内躬恒)、「ゆくさきになりもやするとたのみしを春の限はけふにぞ有りける」(後撰集・三・春下・一四三・紀貫之)などがあるが、これらにも当歌同様に、過去の助動詞「き」が用いられている。「き」は「けり」とは異なり、現在と過去との断絶性に重点を置くことを示す語であるから、自然の漸次的な推移とは別の、暦日上の春と夏という季節の区切りに対応させたものであり、それに伴う詠歌日以前(春)と詠歌日以降(夏)とでの心情の異質さを示そうとしたと見られる。

しかし、当歌の詠歌時点が三月尽日の前日であるとする、当日の場合とは意味合いが異なってくる。つまり、対比されているのは、同じ春という季節の最終日と前日であって、その両日の断絶なのである。その前日までの惜しみ方と、いよいよ最終日での惜しみ方とは比べものにならないということであろう。もちろん後者のほうが思い極まることになる。その意味では、『語釈』「かぎりなるべき」の項に触れたが、「かぎり」は時間的な意味としてだけではなく、文脈的には直接に表わされないものの、惜しみ方に対する評価程度の限界という意味を含んでいるのではないかと考えられる。

このことに関連して気になるのは、『全釈』の【訳】で「以前からずっと(終わってしまうのを)惜しんできた春は」としている点である。「をしむ」という語は、『語釈』「わがをしみこし」の項で述べたように、対象の存在の有無によって意味合いが愛惜か哀惜かで異なる。春が終わることや春と別れることを「をしむ」のは哀惜になるだろう。しかし、春という季節が存在しているにもかかわらず、哀惜するというのは、そもそも不自然ではあるまいか。そうではなく、当歌は、前日までの「愛惜」が当日は否応なく「哀惜」に変わるところにこそ眼目があると考えられるのである。

なお、当歌は、赤人集（一一）と夫木和歌抄（二二八七）にも載る。前者は第二句を「わかれをしみし」とする。このような「わがをしみこし」からの改変は、「をしむ」という語の用法の「哀惜」へのバイアスの反映によるものであろう。

【比較対照】

当句題の原拠となる七言詩の出典はなお不明であるから、単独で解釈するほかないが、「春光只是明朝に有るのみ」という訓読だけでも、句意はほぼ明らかであろう。

句題と和歌との表現上の対応関係を見ると、共通するのは、「春」と「春」、「只」と「ただ」、「明朝」と「あした」であり、句題のみにあるのが、「光」と「是」と「有」、和歌のみが、「かねてより」と「わがをしみこし」の二句、「あけん」「ぞ」「かぎりなるべき」であって、ズレが大きい。

句題の「光」が省かれたのは、「春光」つまり春の光あるいは春の景色という意味での限定が加わるのを避け、春という季節そのものを取り立てようとした結果であらう。「是」という代名詞は漢文的用法であり、和歌にはなじまないことから採られなかったと考えられる。「有」は和歌結句の「かぎりなるべき」に吸収されたとみなされる。

いっぽう、和歌で補充された語句は、一五番歌の句題原拠詩と同様の、三月尽を歌った詩の内容をふまえたものであることを想像させる。下二句内の「あけん」「ぞ」「かぎりなるべき」は、その線にそっての補足説明・強調のための付加であらう。和歌としての独自性があるとすれば、上二句の付加のほうで、単なる補足や音数調整のためだけとは考えがたい。

中でも注意されるのは、「わがをしみこし」という第二句である。「わが」という一人称限定の表現は、漢詩であれ和歌であれ、自明のために省略されることが一般的であることに鑑みれば、他と比べてという取り立てを意味する。「たのみこし」という表現は、初句の「かねてより」とあいまって、思いの継続性を示している。さらに、【補注】に記したような「をしむ」という心情の質的な転換も意図されていたとすれば、このような含意は、句題はもとより、おそらく原拠詩にもなく、千里が独自に示そうとしたものではないかと推察される。これらによって、下二句の詠嘆が、三月尽日の個人的な思いの痛切さを強く喚起させるものになっていると考えられる。

両処春光同日尽（両処の春光、同日に尽く）

一七 はるをのみこもかしこをしめどもみなおなじときつきぬるがうさ

【通釈】

春をここでもあそこでも（至るところで）惜しんでばかりいるけれども（それにもかかわらず）、どこも同時に春が終わってしまうことのつらさよ。

【語釈】

はるをのみ「のみ」は「はるを」を限定するのではなく、「はるを」がかかる「をしめども」までの全体を限定し、春を惜しむという行為だけが行われていることを表す。つまり、春という季節に対して、その最後の日は惜しむこと以外にはないことである。本集一〇番歌の【語釈】「花のみぞ」の項および一五番歌の【語釈】「あかでのみ」の項を参照。「春のみ」の句は他に見られるが、「春のみ」の句は平安時代までは当歌しか検索し得ない。

ここもかしこも『日本国語大辞典 第二版』では、「ここ」と「かしこ」という、特定の二か所を指す場合と、「どこもかも。あたり一面」という、あらゆる所をいう場合の二つがあることが示されている。同辞典が初例とする「往還りここもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりかりとなく」（後撰集・七・秋下・三二六二）では、「あちらもこちらも」（木船重昭『後撰和歌集全注釈』笠間書院、一九八八年）、「南の此地も北の彼地も」（工藤重矩『後撰和歌集』和泉書院、一九九二年）のように、前者の意で解釈される。当歌も句題の「両処」との対応を考えれば、この意味になるが、その場所を特定しえず、また、続く「みな」という語との関係からも、後者の、どこでもの意とする。【比較対照】も参照。『全釈』では、「ここでもかしこでも、それぞれに春を惜しむが」と訳し、「それぞれ」を補足したところからは、惜しむ主体が「ここ」と「かしこ」で異なるように解釈しているようである（句題の原拠詩は明らかにそうである）が、当歌においては、主体はともに詠み手自身であり、そうでなければ下句の「うさ」という詠み手の思いに結び付かない。

をしめども 五音句なので、原則的に初句か第三句にあることになるが、平安時代までの用例を調べると、「をしめどもとどまらなく

に春霞かへる道にしたちぬとおもへば」(古今集・二・春下・一三〇・在原元方)、「をしめどもつひにちりぬるもみぢゆゑふかぬ風にものをこそおもへ」(躬恒集・一五五)などのように、初句に位置することが圧倒的に多い。そして、挙例のように、惜しんでも止まらない春や秋、または花や紅葉などを詠み、その後に作者の思いを続けるのが類型となる。「をしめども」が、当歌のように第三句にあるのは少なく、古今集前後では、「いつとなくさくらさけとかをしめどもとまらで春の空にゆくらん」(貫之集・二三三)、「こゑたててなくしかばかりをしめどもすぎゆく秋はとまらざらまし」(陽成院歌合 延喜十三年九月・八)、「なげきつつすぎゆく春をしめどもあまつそらからふりすててゆく」(千里集・春・二〇)がある程度。本集では「をしむ」は七首に詠まれ、古今集八例に比べると、比率的にはたいへん高く、本集を特徴づける心情に「をしむ」を挙げることができる。特に、四首(一五・一六・一七・二〇)が春部で、惜春の情を詠む歌が目立つ。これは、本集句題の原拠詩のほとんどが白氏文集であり、小島憲之「四季語を通して——「尽日」の誕生——」(『国語国文』一九七七年二月)や田中幹子「『古今集』における季の到来と辞去について——三月尽意識の展開——」(『中文学』一九九七年三月)などが指摘するように、その原拠詩の影響を強く受けた結果と見られる。

みなおなじとき 「みな」は、第三句を言い換えて、どの場所もすべての意。「おなじとき」という表現は、鎌倉時代以降にならないと用例が見出したい。当歌での「おなじとき」というのは、春が尽きる時ということであるから、暦日上の三月尽日のことである。

つきぬるがうさ 「うさ」は、形容詞「う(憂)し」の語幹に接尾語「さ」が付いて名詞化したもの。このように形容詞を名詞化したものを歌末とする用例は、「筑紫舟いまだも来ねばあらかじめ荒ぶる君を見るがかなしさ(見之悲左)」(万葉集・四・五五六・賀茂女王)、「もししきの大宮人の罷り出て遊ぶ今夜の月のさやけさ(月清左)」(万葉集・七・一〇七六)などのように、万葉集から見られる。ただ、「うさ」を歌末とする用例は、「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ」(古今集・十八・雑下・九三五)、「うつつにもしづころなき君なればゆめにもかりとみえつるがうさ」(元良親王集・一二五)のように、古今集前後から見られ、当歌はそれの中でも早い用例であろう。挙例のように、「うさ」の直前には格助詞の「が」あるいは「の」が置かれているが、「うき」という連体形ではなく、名詞化した「うさ」は、その感情を個別的・具体的にではなく、一般的・抽象的に表わす。これは、「つらいこと」と「つらいということ」の違いに類似する。

【補注】

当歌は本集唯一の体言止め歌である。一首の構成は主語と述語に分節されず、表現全体が歌末の「うさ」に収斂する、感動の喚体句となる。とすれば、歌意の中心は「うし」という感情にあることになる。つまり、哀惜の気持ちの究極が辛いということであって、それは通常の「感動」とは質が異なる。

究極となるのは、その時が三月尽日すなわち春の最終日だからである。ただ、これはあくまでも暦の上でのことであり、実際の自然の推移としては、まだどこかで春の景物が見られるかもしれないのに、共通に適用される暦ゆえに、「ここもかしこもみな」なのである。

このように考えると、「うさ」の対象となるのは、たとえば春の花が見られなくなるなどという現実ではなく、季節を規定する暦のほうではないだろうか。「季節」という概念によって、自然の推移に区切りをつけること自体が人為的なものであるから、「花を惜しむ」ならともかく、「春を惜しむ」と言う場合、それはすでに人為による区切りに縛られてしまっているということに他ならない。そのことを「うし」と感じるものがあつたとしても（当代の和歌表現には想定しがたいとしても）、あながちありえないことではあるまい。

当歌における「ここもかしこもみな」という場所を特定しない表現や、「つきぬる」という、既定の一つの事実としては示さない表現、そして「うさ」という感情を抽象化・一般化した表現など、どれも志向しているのは、個別具体的な自然ではなく、普遍的な人為のほうである。

なお、同歌は赤人集（一二）。ただし本文は「はるとのみところどころにをしめどもみなおなじいろにすぎぬるがうさ」や、夫木和歌抄（二二八九）。ただし第四句「同じ日に」にも載る。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の「望駅台三月三十日」（卷十四・〇七六七）と題する七言絶句であり、その転句が句題に採られた。

靖安宅裏当窓柳 靖安の宅裏、窓に当たれる柳、

望駅台前撲地花 望駅台前、地に撲みつる花。

両処春光同日尽 両処の春光、同日に尽く、

居人思客客思家 居人は客を思ひ、客は家と思ふ。

詩題に「三月三十日」とわざわざ付記されていることから明らかなように、この詩は三月尽という、暦における春の最終日に歌ったものである。句題に採られた転句は、そのことを端的に示す表現になっている。

この句における「両処」とは、その文脈から「靖安」と「望駅台」という、友人と自分がいる、二つの別々の場所を示している。この二か所が遠隔でかつ自然環境が異なれば、実際の季節の推移の仕方には遅速があるはずにもかかわらず、暦日上の区切りとしては「同日」であることが強調されているのである。

【語釈】「をしめども」の項に引いた田中論文は、「三月尽詩は、白楽天によって作りだされた暦月における春最後の日を詠んだ詩である」としているが、この原拠詩もそれに相当しよう。続けて、「三月尽詩は平安人を魅了し」、日本漢詩さらには和歌にも応用されたものであり、本集におけるそれは「春の最後の一日という時間へ興味が集中し」、「花も鳥も詠んでいない」「最後の一日という意識のみがある」と指摘している。

句題と和歌の表現上の対応を見ると、意味的には、句題の「両処」と和歌の「ここもかしこも」、「春光」と「はる」、「同日」と「おなじとき」、「尽」と「つきぬる」のように、句題の語全体を和歌はカバーしている。そのうえで補われたのが、「のみ」「をしめども」「みな」「うさ」などであり、これらは句題の内容を具体的あるいは強調的に示すものであつて、和歌独自の要素が付け加えられたというわけではない。

ただし、より細かくみると、対応してはいても、微妙に異なる点が見られる。たとえば、「両処」と「ここもかしこも」であるが、「両処」のほうは原拠詩から、その二つの場所が特定できるのに対して、和歌単独での「ここもかしこも」は場所を特定しえない。そのため、【語釈】同項に述べたように、どこでもの意ととらざるをえず、またそれは原拠詩の趣旨を一般化すれば、適合しうることでもある。また、「春光」と「はる」については、本集一六番歌の【比較対照】に述べたのと同じ事情があつたからと考えられる。

和歌で付加された表現の中で留意されるのは、「をしめども」と「うさ」という感情を表わす表現であり、そのような感情を明示する点が、和歌的であるとも言える。もちろん、白楽天の原拠詩も単に春という季節の終りを事実として示ただけではなく、その結句からは、他ならぬその日だからこそ、互いに春を「をしむ」気持ちを思いやるのが推察されるのであつて、その思いを共有しえない状況に対しては「うし」という気持ちにもつながりうるのであろう。それでも、原拠詩の主意が結句に示された友情にあるとすれば、

季節歌としてはなじみがない内容であったから、当歌はそれを見事に捨象したことになる。

そのうえで、当歌のみを見れば、たしかに「最後の一日という意識のみがある」という、きわめて観念的な詠みぶりである。そのような詠みぶりは、たとえ「平安人を魅了した」三月尽の歌であったとしても、当代にあつては評価されにくいものであつたろう。しかし、千里の試みは、句題和歌という条件付きの和歌を詠むことにあり、その句題が白氏文集から採られているのであるから、原拠詩をふまえた享受は十分に可能、というよりむしろ当然であつたと考えられる。そこになお、句題の直訳にとどまらない、季節歌としての当歌の獨創性があるとすれば、【補足】に述べたように、三月尽のみに特化することにより、季節歌らしい自然ではなく、季節を区切る人爲に対する「うさ」を詠もうとしたところにあると見ることができ。

春翁酒易悲（春翁は酒に悲しみ易し）

一八 はるはるにあひておいぬる身なればやゑひになみだのあかれざるらん

【通釈】

多くの春にあつて老いた身だからなのか、酔いのせいで涙が（この身から）離れないでいるのだろう。

【語釈】

はるはるに「はるはる」を「春」の暁語とすれば、毎年の春に、多くの春に、の意となる。「はるはるに」の用例は稀で、「はるはるにえださしまさるたけのよにおもひつきぬるきみとこそみれ」（宰相中将君達春秋歌合・七〇）が管見に入る程度。ただ、「はるはる」のみでは、「はるはるのかずはわすれず有りながら花さかぬ木をなににうゑけん」（後撰集・十五・雑一・一〇七八・紀友則）、「君がみよはるはるごとにのべにいではけふの小松にひきおとらめや」（能宣集・二八三）などと、後撰集の頃に集中して用例が見られる。なお、類義の表現に「はるごとに」があり、本集一一七番歌に「はるごとにあひてもあはぬわが身かなはなのゆきのみふりまがひつつ」とあ

る（同歌を、異本系統書陵部本では「はるはるにあひてもあはぬ我身かなはな雪にのみふりまさりつつ」としている）。

あひておいぬる「あひて」は初句の「はるはるに」を受け、合わせて「おいぬる」を修飾する。接統助詞「て」による関係付けは文脈により多様であるが、当歌では、前件の「はるはるにあひ」が後件「おいぬる」の原因的な状態を表わすと見ておく。つまり、多くの春に会うことを通じて年をとる、という関係である。春が老いと関連づけられることは、「春にあふとおもふころはうれしくていまひとせのおいぞそひける」（躬恒集・一四〇、拾遺集・一〇〇〇に初句「春立つと」として入集）、「わかなつむ春のたよりに年ふれば老つむ身こそわびしかりけれ」（貫之集・二八二）などと、古今集前後の歌にも見られる。

身なればや 第三句までで確定条件句を構成し、句末の疑問の係助詞「や」は歌末の「らん」と呼応する。「ばや」については、一番歌の【語釈】「むすればや」の項、および一四番歌の【補注】参照。「身」は、肉体の意と、それから転じた自分自身の意があるが、当歌では後述するように、文脈的に前者の意に重点があると考えられる。

ゑひになみだの「ゑひ」は、動詞「ゑふ（酔）」の連用形「ゑひ」が名詞化したもの。和漢朗詠集の雑部に酒の部立があるように、漢詩で酒を詠むのはごく普通であり、「酔」（動詞も含める）の用例も、「花下忘帰因美景 樽前勸酔是春風」（和漢朗詠集・春・春興・一八・白楽天。ただし、白氏文集・〇六一六では「酔」は「酒」）、「海国来朝自遠方 百年一酔謁天裳」（文華秀麗集・宴集・奉勅陪内宴詩・一六・王孝廉）など、枚挙に暇がない。しかし、和歌では、名詞「ゑひ」も動詞「ゑふ」も、用例は少ない。八代集には、「ころもなるたまともかけてしらざりきゑひさめてこそうれしかりけれ」（後拾遺集・二十・雑六・釈教・一一九四・赤染衛門）、「花のもとつゆのなさはほどもあらじゑひなすめそ春の山かぜ」（新古今集・二十・釈教・一九六四・寂然法師）の二例しかなく、ともに釈教歌であり、正面から酒の酔いを詠んだものではない。もつとも、万葉集には、有名な大伴旅人の讃酒歌があり、「世間の遊びの道にすずしきは酔ひ泣きするに（酔泣為尔）あるべかるらし」（万葉集・三・三四七・大伴旅人）、「黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするに（酔泣為尔）なほ及かずけり」（万葉集・三・三五〇・大伴旅人）など見られる。平安時代に入ってから、私家集には、「ゑひにけるわれらはしらずあやもなしたがかつけたるつみにか有りてん」（兼盛集・一二三）、「たをさしてゑひにけらしな五月雨にたちみだれてなくほととぎす」（安法法師集・四五）などと詠まれている。和歌では、酒やそれによる酔いは正統的な歌材・表現対象ではなかったのである。酒によって泣く歌も、挙例の万葉歌を除けば、少なくとも平安時代までは用例を見出しがたい。格助詞「に」は

原因・理由を表し、結句にかかる。酔いのせいで、の意となる。

あかれざるらん「あかれ」は、動詞「飽く」＋助動詞「る」と、動詞「あかる（離）」の二通りが考えられるが、その主語を「なみだ」とすれば、前者の「飽く」ではそぐわないことから、後者のほうが適切と考えられる。「あかる」は、散り散りになって離れるの意。どこから離れるかと言えば、「おいぬる身」からとなる。その場合、「身」は抽象的な自分自身というよりも、自らの肉体とするほうが、涙という生理現象と、具体性という点でふさわしい。「あかる」は、「みかづきのふたみみちよりあかるればわがせもあれもひとりかもぬる」（家持集・一六八）、「めにみえぬかぜをこころにたぐへつやらばかすみにあかれこそせめ」（伊勢集・二八九）などのように用いられている。歌末の「らん」は、第三句末の疑問の係助詞「や」と呼応し、確定的事態に対する原因・理由の推量を表わす。

【補注】

当歌にも認められる「…ばや…らむ」という表現構成の特色については、一四番歌【補注】を参照されたい。

このような表現構成の全体は類型的であるのに対して、前件における「はるはるにあひておいぬる」、後件における「ゑひになみだのあかれざる」という表現それぞれは、かなり独創的である。換言すれば、類型的な枠組みがあるからこそ、独創的な表現が可能であったとも言えよう。

前件の表現に関しては、次のように言える。老いるというのは、時間の経過に伴う自然の摂理であるから、どんなことをして生きようとも、生き物に共通に訪れる現象である。にもかかわらず、当歌ではそれを「はるはるにあひて」ということに特化している。つまり、多くの四季に等しく出会ってきたはずなのに、春だけを取り立て、その結果、老いるとするのである。

後件の表現の独創性は、次の点にある。老いるというのは、単に年を取るだけではなく、それは何よりも「身」つまり肉体の衰えとして現れる。若い頃は、酒に酔っても泣くのをこらえることができたのに、今や涙腺も緩くなり、何かにつけ涙もろく、そのうえ酒を飲めば泣き上戸となりがちである。当歌では、それを一般論としてではなく、前件での春の特化と結び付ければ、時期的に春を惜しむことに關してということになる。老いとともに、春の惜しみ方も、若い頃に比べて、より切実になってしまふのである。「なみだのあかれざる」という否定表現は、涙がいつになっても涸れないことを表わしている。

なお、同歌は、赤人集（二三）に初句「はるはると」で載る。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の「残春詠懷贈楊慕巢侍郎」（卷六十六・三三六二）と題する五言八韻の排律であり、句題はその末句から採られている。

位逾二品日 位二品を逾ゆる日、

年過六旬時 年六旬を過ぐる時。

不道官班下 官班の下なるを道はざるも、

其如筋力衰 其れ筋力の衰へは如せん。

猶憐好風景 猶ほ好風景を憐れみ、

軫重旧親知 軫た旧き親知を重んず。

少壮難重得 少壮は重ねて得難く、

飲娛且強為 飲娛は且し強ひて為さん。

興来池上酌 興は来る、池上の酌、

醉出袖中詩 酔ひて出だす袖中の詩。

静話開襟久 静かに話せば襟を開くこと久しく、

閑吟放盞遲 閑に吟じて盞を放つこと遅し。

落花無限雪 落花、無限の雪、

残鬢幾多糸 残鬢、幾多の糸。

莫説傷心事 説くこと莫かれ、傷心の事、

春風酒易悲 春風に酒は悲しみ易し。

本釈論（一）の凡例で示したように、引用の原拠詩は新釈漢文大系によるが、その末句は、当歌の句題「春翁」ではなく、「春風」とする。これは、新釈漢文大系や『全釈』が指摘するように、白氏文集の本文に「春翁」「春風」の二種があり、千里が依拠した本文

が「春翁」であつたと思われる。

詩題に「残春」とあり、第十三句に「落花無限雪」、そして末句に「春翁」とあるところから、歌われたのがその時期と特定されるが、春歌の、しかもその暮れの句題としては、末句よりも、落花を用いた第十三句のほうが似つかわしい。しかし、だからこそ、あえてそれを避けての千里の選択だつたと考えられる。詩においても、季節の推移と人生の推移が重ね合されているのは明らかであり、それを和歌にしようとしたのであろう。

表現上の対応関係としては、句題の「春翁」には和歌の「はるはるにあひておいぬる身なればや」の上三句、「酒易悲」には「ゑひになみだのあかれざるらん」の下二句が相当する。つまり、両者はほぼ全体にわたって対応しているということである。ただし、それをもって、当歌が句題の直訳であることにはならない。

「春翁」は「春風」に比べれば、詩語として通用していたとはいいがたく（全唐詩にも見当たらない）、原拠詩においては、春頃の老人という意で臨時的に用いたものであろう。句題の「春翁酒易悲」の「春翁」とは、白氏自身のことでもあり、また老人一般にもあてはまることとして、老人は酒が入って酔うと泣きっぽくなる、とくに惜春の思いにとらわれがちな時分には、ということを表わすと見られる。

この「春翁」に対する「はるはるにあひておいぬる身」という表現は、単に季節を限定するのみならず、長い時間の経過をも表わし、その結果として「おいぬる身」であることを示しているという点で、句題とは異なる。これは、原拠詩全体をふまえてのことと考えられる。また、「ゑひになみだのあかれざるらん」という表現は、「酒易悲」を具体的な状態として表わすだけでなく、その否定表現からは、当人の予想に反するという意が含まれている。

そのうえで、当歌独自とみなされるのは、「…ばや…らむ」という表現構成により、句題の一般的な事実としての内容を、原因と結果という二つの事柄に分けて関係付けた点である。

当歌における結果（「ゑひてなみだのあかれざる」）は既定の事態ではあるが、それをただそのまま事実として受け入れているわけではなく、不審に思う気持ちがある原因（「はるはるにあひておいぬる身」）を導き出しているのである。それは、単に「おいぬる身」だからなのではなく、「はるはるにあひて」つまり何度も春との出会いと別れを繰り返し、その都度、惜しんできたという体験の積み重

ねがあるからということである。

このような原因推量が、どれほどの意外性を帯びているかについては、何とも言えない。ただ、千里がこの句を題として選んだとき、春歌らしさを示すためには、季物を取り上げない代わりに、春という季節を、一過的ではなく反復的・累積的なものとして示し、際立たせようと考えたのではないかと思量される。それが、本集歌の持つ観念性という特徴にもつながっているのであるが。

【付記】

本稿には、小池について交付された、JSPS科研費16K02390（基盤研究C）および令和元年度長野工業高等専門学校特別経費（申請研究費）による研究成果が反映されている。